

世界有数の西洋音楽資料コレクター——紀州の殿様、徳川頼貞

2017年12月、徳川家お膝下の和歌山市の和歌山県立博物館と和歌山県立図書館で、「南葵(なんき)音楽文庫」の公開が始まった。ベートーヴェンの殴り書きのような激しい筆致の自筆譜や直筆の手紙(芸術性より楽譜の売れ行きを優先する出版社への不満を露わに記している)、ヴェルリオーズの劇的交響曲『ロメオとジュリエット』の署名付き自筆譜、パーセルの世界に2つしか残存しないオペラ『デイドとエネアス』の筆写楽譜、作曲家達の息吹が伝わってくるような手控えや美しい特装本・稀覯本等も展示されている。

「南葵音楽文庫」は、2万点にのぼる貴重な西洋音楽関係資料から成り、2016年(徳川吉宗が、1716年に徳川家8代將軍となって300年である)、現在所蔵している読売日本交響楽団と和歌山県知事による寄託契約の調印が行われた。文庫資料の整理完了予定は、2019年。1619年に徳川頼宣が紀州藩初代藩主となってから丁度400年にあたる。

この南葵音楽文庫について、その成り立ちや、創設者である紀州徳川家第16代当主、徳川頼貞(よりさだ)をめぐるエピソードを記したい。

徳川頼貞は、1892(明治25)年、紀州徳川家第15代当主、徳川頼倫(よりみち)の長男として、現在の東京都港区麻布台の紀州徳川家本邸で生まれた。父、頼倫は田安徳川家の出身で、8歳で紀州徳川家第14代当主、徳川茂承の養子となり、後に茂承の長女と婚姻し、家督を相続した。頼倫は2年間の英国留学(当時、渡英中の南方熊楠や孫文とも会っている)と欧州視察から帰国後、自邸に図書館「南葵文庫」を開設した(田安徳川家の芸術愛好の伝統をひく。後に、日本図書館協会総裁に就任)。また、頼倫は、「南葵育英会」を設立し、県出身の学生に奨学金の貸与等を行った。

頼貞は、少年時代から西洋音楽を愛し、21歳で英国ケンブリッジ大学音楽理論科に留学した(付き人として、小泉信三らが随行した)。豊かな社交性をもち、その豪遊ぶりは、「マルキ(侯爵)・トクガワ」として、ヨーロッパの音楽・社交界で話題となった。頼貞は、ブッチーニやサン＝サーンス、カザルスら、多くの音楽家と交流し、楽譜や関連資料を買いもめた。また、英国の音楽ホールに感激し、日本に本格的な音楽堂を建設したいと父に願い、麻布台の邸内に英国の建築家サー・ブルメル・トーマスの基本設計(実施設計は、日本在住のヴォリーズに依頼)で「南葵楽堂」を併設(1918)、そこに設置するためのパイプオルガンを英国のアボット・スミス社に発注(当時7万円。1,379本のパイプから成る現在では珍しい空気式アクション機構)、1920年に横浜港に到着したが、日本で組立てられず、技師を英国から呼び寄せた。コンサート用としては日本最古で、現在も旧東京音楽学校奏楽堂で演奏される。

南葵音楽文庫は、南葵楽堂の地下室に設けられ、頼貞が英国で落札した「カミングス・コレクション」(米国の国会図書館と頼貞に二分され、購入)、高名なチェロ奏者ホルマンの死去に寄贈された楽譜等を母胎とする世界屈指の蒐集物で、現在の金額にして、1,500億円もの巨費が投じられたという。彼は優れた音楽家達のパトロンであったが、徳川家の財政にも少なからず影響を与えた。その後、文庫は、1923年の関東大震災や第2次世界大戦の戦禍の中で複雑な転遷を経たが、大きな散逸は免れた。

ところで、音楽物語『ピーターと狼』等で知られるロシアの作曲家・ピアニスト(作家でもある)、セルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)は、1918年、日本を訪れている(前年に起こったロシア革命の混乱を逃れて、南米チリに渡航しようとして、ウラジオストクから日本の敦賀に上陸、中継地の横浜港に着いたが、既に出港していた。船待ちの間、渡航滞在費稼ぎも目的に東京や横浜で「ピアノ大演奏会」を開催、2ヵ月滞在した)。そして、仲介者のベール男爵の紹介で、頼貞邸を訪問、ロシアの偉大な作曲家スクリャービンやドビュッシー等のピアノ曲を演奏し、昼食を共にした。

プロコフィエフは、頼貞の印象について、その著書『日本滞日記』に次のように記している。

「1918年7月12日、…徳川侯爵は、若くて非常に面白い日本人で、西洋音楽にとっても入れ込んでいる。日本の貴族とはどんなものか、興味をもって見たが、侯爵は全くもってヨーロッパ的な人物で、実に魅力的で飾り気がなく、東洋をまるで感じなかった。」

その折、頼貞はプロコフィエフに、「日本滞在の記念として、自分のためにピアノ・ソナタを書いて貰えないか」と頼んだ。プロコフィエフは、侯爵からの「作曲の注文という仕事」に大いに心が動いたが、微妙な行き違い(頼貞の口頭での注文と、プロコフィエフが持っている正式な注文手続が進まず)等で実現しなかった。プロコフィエフは日記に未練と苛立ちを記しつつ、8月2日、米国に向け、出港した。

その3年後の1921年、欧州外遊中の頼貞は、パリの劇場(ストラヴィンスキーのバレエ組曲『火の鳥』や『春の祭典』の公演)で、プロコフィエフと邂逅、二人は再会を祝した。頼貞のボックス席の近くに、プロコフィエフは片眼鏡をかけた紳士、ストラヴィンスキーと一緒にいて、頼貞に紹介、彼らは握手し、会話をした。「ストラヴィンスキーは、外見より社交的で饒舌であった」と、後に頼貞は述懐している。

また、プロコフィエフは、1923年9月8日の日記に、「日本で大きな地震があったという。徳川氏らに見舞いの手紙を書いた。無事だろうか…?」と書き、頼貞も自らの手記に、「大正12年9月、…プロコフィエフは、大変親切な見舞状をくれた。彼は言葉の少ない人であるが、友情に厚い人である」と記している。

関東大震災で、頼貞邸の「南葵学堂」は、大きく破損して閉鎖、後に解体されたが、頼貞が途方もない情熱をかけて集めた、現存する多くのコレクションは、今後ますますその価値を高め、専門家のみならず多くの人に本物の音楽芸術がもつ深い魅力を発するものであろう。

(谷 奈々)

21世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

VOL.88

発行 平成 30 年 4 月 13 日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町 2 丁目 1 番地
フォルテワジマ 6階
TEL (073)432-1444 (代)
FAX (073)424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 有限会社 阪口印刷所

無断転載・複写を禁ずる

裏表紙の写真は、当研究所 OB 萬羽昭夫氏撮影